

兜

岡本綺堂

青空文庫

わたしはこれから邦原君の話を紹介したい。邦原君は東京の山の手に住んでいて、大正十二年の震災に居宅と家財全部を焼かれたのであるが、家に伝わっていた古い兜が不思議に唯ひとつ助かった。

それも邦原君自身や家族の者が取出したのではない。その一家はほとんど着のみ着のまま目白の方面へ避難したのであるが、なんでも九月なかばの雨の日に、ひとりの女がその避難先へたずねて来て、震災の当夜、お宅の門前にこんな物が落ちていました

からお届け申しますと言つて、かの兜を置いて歸つた。そのときあたかも邦原君らは不在であつたので、避難先の家人はなんの気もつかずにそれを受取つて、彼女の姓名をも聞き洩らしたというのである。何分にもあの混雑の際であるから、それも扨よんどころないことであるが、彼女はいつたい何者で、どうして邦原君の避難さきまでわざわざ届けに来てくれたのか、それらの事情は一いっさ切いわからなかつた。

いずれその内には判るだろうと、邦原君も深く気にも留めずにいたのであるが、その届け主ぬしは今に至るまでわからない。焼け跡の区画整理は片付いて邦原君一家は旧宅地へ立ち戻つて来たので、知人や出入りの者などについて心あたりを一々聞きただしてみた

が、誰も届けた者はないという。そこで更に考えられることは、
平^{へいぜい}生^{せい}ならともあれ、あの大混乱の最中に身許^{みもと}不明の彼女が、た
とい邦原家の門前に落ちていたとしても、その兜をすぐに邦原家
の品物と認めたとというのが少しく不審である。第一、邦原家の一
族は前にもいう通り、ほとんど着のみ着のまま^{たちの}で立退いたのであ
るから、兜などを門前まで持出した覚えはないというのである。
そうなると、その事情がいよいよ判らなくなる。まさかはその兜
が口をきいて、おれを邦原家の避難先へ連れて行けと言ったわけ
でもあるまい。蘇^{そてつ}鉄^{てつ}が妙国寺へ行こうといい、安宅丸^{あたけまる}が伊豆へ
行こうといった昔話を、今さら引合いに出すわけにもゆくまい。

甚だよくない想像であるが、門前に落ちている筈^{はず}のないかの兜

が、果たして門前に落ちていたとすれば、当夜のどきくさに紛れて何者かが家の内から持出したものではないかと思われる。いったん持出しては見たものの兜などはどうにもなりそうもないので、何か他の金目かねめのありそうな物だけを抱え去つて、重い兜はそのまゝ門前に捨てて行つたのではあるまいか。それを彼女が拾つて来てくれたのであろう。盗んだ本人がわざわざと届けに来るはずもあるまいから、それを盗んだ者と、それを届けてくれた者とは、別人でなければならぬ。盗んだ者を今さら詮議せんぎする必要もないが、届けてくれた者だけは、それが何人なんびとであるかを知つて置きたいような気がしてならない、と邦原君は言つている。

以下は邦原君の談話を紹介するのであるから、その兜について

心あたりのある人は邦原君のところまで知らせてやってもらいたい。それによつて、彼は今後その兜に対する取扱い方をすこしく変更することになるかも知れないのである。

まずその兜が邦原家に伝わつた由来を語らなければならぬ。

文久二年といへば、今から六十余年のむかしである。江戸の末期であるから、世の中はひどく騒々しい。將軍家のお膝元という江戸も頗る物騒で、押込みの強盗や辻斬りが毎晩のように続く。その八月の十二日の宵である。この年は八月に閏があつたそうである。ここにいう八月は閏の方であるから、平年ならばもう九月という時節で、朝晩はめつきりと冷えて来た。その冷たい夜露を踏んで、

ひとりの男が湯島の切通しをぬけて、本郷の大通りへ出て、かの
加州かしゅうの屋敷の門前にさしかかった。

前にもいう通り、今夜は八月十二日で、月のひかりは冴え渡つ
ているので、その男の姿はあざやかに照らし出された。かれは単ひ

衣とえものの尻はしよを端折つた町人ていの男で、大きい風呂敷包みを抱え

ている。それだけならば別に不思議もないのであるが、彼はその
頭に鉄の兜をいただいていた。兜には鋳しころも付いていた。たといそ

れが町人でなくても、単衣をきて兜をかぶった姿などというもの
は、虫ぼしの時か何かでなくてはちよつと見られない凶であろう。

そういう異いぎ形ようの男が加州の屋敷の門前を足早に通り過ぎて、や
がて追分おいわけに近づこうとするときに、どこから出て来たのか知ら

ないが、不意につかつかと駆け寄って、うしろからその兜の天てつぺ辺へ斬りつけた者があつた。

男はあつと驚いたが、もう振り返つてみる余裕もないので、半分は夢中で半町ちやうあまりも逃げ延びて、路ばたの小さい屋敷へかけ込んだ。その屋敷は邦原家で、そのころ祖父の勘十郎は隠居して、父の勘次郎が家督を相続していたが、まだ若じやくねん年で去年ようよう番入りをしたばかりであるから、屋敷内のことはやはり祖父が支配していたのである。小しょうしん身ではあるが、屋敷には中ちゆうげん間二人を召使つている。

兜をかぶつた男は、大きい銀杏いちやうの木を目あてに、その屋敷の門前へかけて来たが、夜はもう五つ（午後八時）を過ぎているの

で、門は締め切つてある。その門をむやみに叩いて、中間のひとりが明けてやるのを待ちかねたように、彼は息を切つてころげ込んで来て、中の口——すなわち内玄関の格子さきでぶつ倒れてしまつた。

兜をかぶつていたので、誰だかよく判らない。他の中間も出てきて、まずその兜を取つてみると、彼はこの屋敷へも出入りをする金兵衛という道具屋であつた。金兵衛は白はくさんまえまち山前町に店を持つていて、道具屋といつても主におもよろい鎧兜や刀劍、槍、弓の武器を取扱つていたので、邦原家へも出入りをしている。年は四十前後で、頗るのんきな面白い男であるので、さのみ近しく出入りをするという程でもないが、屋敷内の人々によく識られているので、今夜

彼があわただしく駆け込んで来たについて、人々もおどろいて騒いだ。

「金兵衛。どうした。」

「やられました。」と、金兵衛は倒れたままで唸った。「あたまの天辺から割られました。」

「喧嘩か、辻斬りか。」と、ひとりの中間が訊いた。

「辻斬りです、辻斬りです。もういけません。水をください。」と、金兵衛はまた唸った。

水をのませて介抱して、だんだん検^{あらた}めてみると、彼は今にも死にそうなことを言っているが、その頭は勿論、からだの内にも別に疵^{きず}らしい跡は見いだされなかった。どこからも血などの流れて

いる様子はなかった。

「おい、金兵衛。しつかりしろ。おまえは狐にでも化かされたのじゃあねえか。」と、中間らは笑い出した。

「いいえ、斬られました。確かに切られたんです。」と、金兵衛は自分の頭をおさえながら言った。「兜の天辺から梨子なしわ割りにされたんです。」

「馬鹿をいえ。おまえの頭はどうもなっていないじゃあねえか。」

押し問答の末に、更にその兜をあらためると、成程その天辺に薄い太刀疵のあとが残っているらしいが、鉢その物がよほど堅固に出来ていたのか、あるいは斬った者の腕が鈍にぶかったのか、いずれにしても兜の鉢を撃ち割ることが出来ないで、金兵衛のあたま

は無事であったという事がわかった。

「まったく一太刀ひとでざくりとやられたものと思つていました。」と、金兵衛はほつとしたように言つた。その口ぶりや顔付きがおかしいので、人々は又笑つた。

それが奥にもきこえて、隠居の勘十郎も、主人の勘次郎も出て来た。

金兵衛はその日、したやおなりみち下谷御成道の同商売の店から他の古道具類と一緒にかの兜を買取つて来たのである。その店はあまり武具を扱わないので、兜は邪魔物のように店の隅に押込んであつたのを、金兵衛がふと見付け出して、元値同様に引取つたが、他にもいろいろの荷物があつて、その持ち抱えが不便であるので、彼は兜を

かぶることにして、月の明るい夜道をたどって来ると、はか図らずもかの災難に出逢ったのであった。最初から辻斬りのつもりで通行の人を待っていたのか、あるいは一時の出来ごころか、いずれにしても彼が兜をかぶっていたのが禍わざわいのもとで、斬る方からいえば兜の天辺から真つ二つに斬つてみたいという注文であつたらしい。いくら夜道でも兜などをかぶつてあるくから、そんな目にも逢うのだと、勘十郎は笑いながら叱つた。

それでも彼は武士である。一面には金兵衛のばかばかしさを笑いながらも、勘十郎はその兜を見たくなくなった。斬つた者の腕前は知らないが、ともかくも鉢の天辺から撃ちおろして、兜にも人つつがも恙ないという以上、それは相当のかぶとし冑師の作でなければならな

いと思ったので、勘十郎は金兵衛を内へ呼び入れて、あかり燈火の下でその兜をあらためた。

刀剣については相当の鑑定眼を持っている彼も、兜についてはなんにも判らなかつたが、それが可なりに古い物で、鉢きたの鍛えも決して悪くないということだけは容易に判断された。世のありさまが穏やかでなくなつて、いずかたでも武具の用意や手入れに忙がしい時節であるので、勘十郎はその兜を買いいたいと言ひ出すと、金兵衛は一も二もなく承知した。

「どうぞお買いください。これをかぶっていた為にあぶなく真つ二つにされるところでした。こんな縁喜えんぎの悪いものは早く手放してしまいとうございませす。」

その代金は追つて受取ることにして、彼はその兜を置いて歸つた。

二

兜の価あたいは幾らであつたか、それは別に伝わっていないが、その以来、兜は邦原家の床の間に飾られることになって、下谷の古道具屋の店にころがつているよりは少しく出世したのである。或る人に鑑定してもらうと、それは何代目かの明みょうちん 珍ちんの作であろうというので、勘十郎は思いもよらない掘出し物をしたのを喜んだという話であるから、おそらく捨値同様に値切り倒して買入れた

のであろう。

それはまずそれとして、その明くる朝、本郷の追分に近い路ばたに、ひとりの侍が腹を切つて死んでゐるのを発見した。年のころは三十五、六で、見苦しからぬ扮装いでたちの人物であつたが、どこかの何者であるか、その身許を知り得るうような手がかりはなかつた。その噂うわさを聞いて、金兵衛は邦原家の中間らにささやいた。

「その侍はきつとわたしを斬つた奴ですよ。場所がちようど同じところだから、わたしを斬つたあとで自分も切腹したんでしよう。」

「お前のような唐茄子頭とうなすを二つや三つ斬つたところで、なにも切腹するにや及ぶめえ。」と、中間らは笑つた。

金兵衛はしきりにその侍であることを主張していたが、彼もその相手の人相や風俗を見届けてはいないのであるから、しよせんは水かけ論に終るのほかはなかつた。しかし彼の主張がまんざら根拠のないことでもないという証拠の一つとして、その侍の刀の刃がよほど零れてこぼいたという噂が伝えられた。彼は相手の兜を斬り得ないで、却って自分の刀の傷ついたのを恥じくや悔んで、いさぎよくその場で自殺したのであろうと、金兵衛は主張するのであつた。

どういふ身分の人か知らないが、辻斬りでもするほどの男がまさかにそれだけのことで自殺しようとは思われないので、万一それが金兵衛の兜を斬った侍であつたとしても、その自殺には他の

事情がひそんでいなければならぬと認められたが、その身許は結局不明に終つたということであつた。

いずれにしても、それは邦原家にとつて何のかけり合ひもない出来事であつたが、その兜について更に新しい出来事が起つた。

それからふた月ほどを過ぎた十月のなかばに、兜が突然に紛失したのである。それは小春日和のうららかに晴れた日の午^{ひる}すぎで、当主の勘次郎は出番の日に當つていたので朝から留守であつた。

隠居の勘十郎も牛込辺の親類をたずねて行つて留守であつた。兜はそのあいだに紛失したのであるから、隠居と主人の留守を窺つて、何者かが盗み出したのは明白であつたが、座敷の縁側にも人の足跡らしいものなどは残されていなかった。ほかにはなんにも

紛失ものはなかった。賊は白昼大胆に武家屋敷の座敷へ忍び込んで、床の間に飾つてある兜ひとつを盗み出したのである。

その当時の邦原家は隠居とその妻のお国と、当主の勘次郎との三人で、勘次郎はまだ独身であつた。ほかには中間二人と下女ひとりで、中間らはいずれも主人の供をして出ていたのであるから、家に残っているのはお国と下女だけで、かれらは台所で何か立ち働いていた為に、座敷の方にそんなことの起つているのを、ちつとも知らなかつたというのである。

盗んだ者については、なんの手がかりもない。しいて疑えば、日ごろ邦原家へ出入りをして、その兜を見せられた者の一人が、羨まし^{うらや}しさの余り、欲しさの余りに悪心を起したものと想像さ

れないことはないので、あれかこれかと数えてゆくと、その嫌疑者が二、三人ぐらゐは無いでもなかつたが、別に取留めた証拠もないのに、武士に対して盗人のうたがいなどを懸けるわけにはゆかない。邦原家では自分の不注意とあきらめて、何かの証拠を見いだすまでは泣き寝入りにして置くのほかはなかつた。

「どうも普通の賊ではない。」と、勘十郎は言つた。

床の間には箱入りの刀剣類も置いてあつたのに、賊はそれらに眼をかけず、扱よりに扱よつて古びた兜ひとつを抱え出したのを見ると、最初から兜を狙つて来たものである。まさかにかの金兵衛が取返しに来たのでもあるまい。賊はこの屋敷に出入りする侍の一人に相違ないと、勘十郎は鑑定した。勘次郎もおなじ意見であ

った。

それにつけても、かの兜の出所をよく取とり糺ただして置く必要があると思つたので、邦原家では金兵衛をよび寄せて詮議すると、金兵衛もその紛失に驚いていた。実は自分もその出所を知っていないのであるから、早速下谷の道具屋へ行つて聞合せて来るといつて歸つたが、その翌日の夕方に再び来て、次のようなことを報告した。

「けさ下谷へ行つて聞きますと、あの兜はことしの五月、なんでも雨のびしよびしよ降る夕方に、二十七、八の女が売りに来たんだそうです。わたしの店では武具を扱わないから、ほかの店へ持つて行つてくれと一旦は断わつたそうですが、幾らでもいいから

引取つてくれと頼しきりに頼むので、こつちも気の毒になつてとうとう買い込むことになつたのだということです。その女は屋敷者らしい上品な人でしたが、身なりは余りよくない方で、破やれた番傘をさしていて、九つか十歳とおぐらいの女の子を連れていたそうで、まあ見たところでは浪人者か小身の御家人ごけにんの御新造でもあろうかという風ふう体で、左の眼の下に小さい痣あざがあつたそうです。」

それだけのことでは、その売うりぬし主についてもなんの手がかりを見いだすことも出来なかつた。まあいい。そのうちには何か知れることもあるだろうと、邦原家でももう諦めてしまった。そうして、またふた月あまりも過ぎると、十二月の末の寒い日である。ゆうべから吹きつづく空からつ風に鼻先を赤くしながら、あの金兵衛

がまた駈け込んで来た。

「御隠居さま、一大事でございます。」

茶の間の縁側に出て、鉢植えの梅をいじくっていた勘十郎は、内へ引つ返して火鉢の前に坐った。

「ひどく慌てているな。例の兜のゆくえでも知れたのか。」

「知れました。」と、金兵衛は息をはずませながら答えた。「どうも驚きました。まったく驚きました。あの兜には何か崇たたっているんですな。」

「崇たたっている……。」

「わたくしと同商売の善吉という奴が、ゆうべ下谷の坂本の通りでやられました。」と、金兵衛は顔をしかめながら話した。「善

吉は下谷金杉に小さい店を持っているんですが、それが坂本二丁目の往来で斬られたんです。こいつはわたくしと違って、うしろ袈裟げさにばっさりやられてしまいました。」

「死んだのか。」と、勘十郎も顔をしかめた。

「死にました。なにしろ倒れているのを往来の者が見付けたんですから、どうして殺されたのか判りませんが、時節柄のことですからやっぱり辻斬りでしょう。ふだんから正直な奴でしたが、可哀そうなことをしましたよ。それはまあ災難としても、ここに不思議な事というのは、その善吉も兜をかかえて死んでいたんです。」

「おまえはその兜を見たか。」

「たしかに例の兜です。」と、金兵衛は一種の恐怖にとらわれて
いるようにささやいた。「同商売ですから、わたくしも取りあえ
ず悔みに行つて、その兜というのを見せられて実にぎよつとしま
した。死人に口無しですから、一体その兜をどこから手に入れて、
引つかかえて来たのか判らないというんですが、わたくしといい、
善吉といい、その兜を持っている者が続いてやられるというのは、
どうも不思議じゃありませんか。考えてみると、わたくしなぞ
は運がよかつたんですね。兜をかぶっていたのが仕合せで、善吉
のように引つかかえていたら、やっぱり真つ二つにされてしまつ
たかも知れないところでした。」

それが兜の崇りと言い得るかどうかは疑問であるが、ともかく

も邦原家から盗み出されたかの兜がどこかを転々して善吉の手に渡つて、それを持ち帰る途中で彼も何者にか斬られたというのは事実である。但しその兜を奪い取る目的で彼を殺したものでなければ、兜が彼の手に残っているはずはない。その兜と辻斬りとは別になんの係合いもないことで、単に偶然のまわり合せに過ぎないらしく思われるので、勘十郎はその理屈を説明して聞かせたが、金兵衛はまだほんとうに呑み込めないらしかった。

その兜には何かの祟りがあつて、それを持つている者はみな何かの禍いを受けるのであらうと、彼はあくまでも主張していた。「それでは、最初お前にその兜を売った御成道の道具屋はどうした。」と、勘十郎はなじるように訊いた。

「それが今になると思い当ることがあるんです。御成道の道具屋の女房はこの七月に霍乱かくらんで死にました。」

「それは暑さに中あたつたのだろう。」

「暑さにあたって死ぬというのが、やっぱり何かの祟りですよ。」

金兵衛はなんでもそれを兜の祟りに故事こじつけようとしているのであるが、勘十郎はさすがに大小を差している人間だけに、むやみに祟りとか因縁いんねんとかいうような奇怪な事実を信じる気にもなれなかった。

「そこで旦那。どうなさいます。その兜を又お引取りになりますか。むこうでは売るに相違ありませんが……。」と、金兵衛は訊いた。

「ぎあ。」と、勘十郎もかんがえていた。「まあ、よそうよ。」
「わたくしもそう思っていました。あんな兜はもうお引取りにならない方が無事でございますよ。第一、それを持って来る途中で、わたくしが又どんな目に逢うか判りませんからね。」

言うだけのことをいって、彼は早々に帰った。

三

下谷の坂本通りで善吉を斬ったのは何者であるか、このごろ流
行る辻斬りであろうというだけのことで、遂にその手がかりを獲^え
ずに終った。主人をうしなつた善吉の家族は、店をたたんで何処

へか立退いてしまったので、兜のゆくえも判らなかつた。おそらく他の諸道具と一緒に売払われたのであろうと、金兵衛は言つていた。

それから四年目の慶応二年に、隠居の勘十郎は世を去つて、相続人の勘次郎が名実ともに邦原家の主人あるじとなつた。かれはお町という妻を迎えて、慶応三年にはお峰という長女を生んだ。それが現代の邦原君の姉である。

その翌年は慶応四年すなわち明治元年で、勘次郎は二十三歳の春をむかえた。この春から夏へかけて、江戸に何事が起つたかは、改めて説明するまでもあるまい。勘次郎は老いたる母と若い妻と幼い娘とを知己しるべのかたにあずけて、自分は上野の彰しょうぎ義隊に馳はせ

加わった。

五月十五日の午後、勘次郎は落武者おちむしやの一人として、降りしきる五月雨さみだれのなかを根岸のかたへ急いでゆくと、下谷から根岸方面の人々は軍いくさの難を逃がれようとして、思い思いに家財を取りまとめて立退いた後であるから、路ばたにはいろいろの物が落ち散つていて、さながら火事場のようである。そのあいだを踏みわけて、勘次郎はともかくも箕輪みのわの方角へ落ちて行こうとすると、急ぐがままに何物にかつまずいて、危うく倒れかかった。踏みとまつて見ると、それは一つの兜であつた。しかも見おぼえのある兜であつた。かれはそれを拾い取つて小脇にかかえた。

持っている物でさえも、なるべくは打捨てて身軽になろうとす

る今の場合に、重い兜を拾ってどうする気であつたか。後日ごにちになつて考えると、彼自身にもその時の心持はよく判らないとの事であつたが、勘次郎は唯なんとなく懐かしいように思つて、その兜を拾いあげたのである。そうして、その邪魔物を大事そうに引つかかえて又走り出した。

箕輪のあたりまで落ちのびて、彼は又かかんがえた。雨が降つているものの、夏の日はまだなかなか暮れない。千住せんじゆの宿しゆくにはおそらく官軍が屯たむろしているであろう。その警戒の眼をくぐり抜けるには、暗くなるのを待たなければならぬ。さりとして、往来にさまよつては人目に立つと思つたので、彼は円通寺に近い一軒の茅葺かやぶき家根をみつけて駈け込んだ。

「彰義隊の者だ。日の暮れるまで隠してくれ。」

この場合、忌いやといえどんな乱暴をされるか判らないのと、こ
こらの者はみな彰義隊に同情を寄せているので、どこの家でも
彰義隊の落武者を拒こぼむものは無かつた。ここの家でもこころよく
承知して、勘次郎を庭口から奥へ案内した。百姓家とも付かず、
店屋てんやとも付かない家うちで、表には腰こし高ただかの障子をしめてあつた。こ
こらの事であるから相当に広い庭を取つて、若葉の茂つている下
に池なども掘つてあつた。しかしかなり古い家で、家内は六畳
二間しかないらしく、勘次郎は草鞋わらじをぬいで、奥の六畳へ通され
ると、十六、七の娘が茶を持って来てくれた。その母らしい三十
四、五の女も出て来て挨拶あいさつした。身なりはよくないが、二人と

もに上品な人柄であつた。

「失礼ながらおひもじくはございませんか。」と、女は訊いた。

朝からのたたかいで勘次郎は腹がすいているので、その言うがままに飯を食わせてもらうことになつた。

「この家うちに男はいないのか。」と、勘次郎は膳に向いながら訊いた。

「はい。娘と二人ぎりでございます。」と、女はつつましやかに答えた。その眼の下に小さい痣あざのあるのを、勘次郎は初めて見た。「なんの商売をしている。」

「ひと仕事などを致しております。」

飯を食うと、朝からの疲れが出て、勘次郎は思わずうとうと

眠つてしまつた。やがて眼がさめると、日はもう暮れ切つて、池の蛙かわずが騒々しく鳴いていた。

「もうよい時分だ。そろそろ出掛けよう。」

起きて身支度をする、いつの間に用意してくれたのか、蓑みの笠かさのほかに新しい草鞋までも取揃えてあつた。腰弁当の握り飯もこしらえてあつた。勘次郎はその親切をよろこんで懐ろから一枚の小判を出した。

「これは少しだが、世話になつた礼だ。受取つてくれ」

「いえ、そんな御心配では恐れ入ります。」と、女はかたく辞退した。「いろいろ失礼なことを申上げるようでございますが、旦那さまはこれから御遠方へいらつしやるのですから、一枚の小判

でもお大切でございます。どうぞこれはお納めなすって下さいまし。」

「いや、そのほかにも多少の用意はあるから、心配しないで取つてくれ。」

彼は無理にその金を押付けようとすると、女はすこしく詞をことばあらためて言った。

「それでは甚だ勝手にましゅうございますが、お金の代りにおねだり申したい物がございますが……。」

「大小は格別、そめほかの物ならばなんでも望め。」

「あのお兜をいただきたいのでございます。」

言われて、勘次郎は気がついた。彼は拾つて来たかの兜を縁側

に置いたまままで、今まで忘れていたのであった。

「ああ、あれか。あれは途中で拾って来たのだ。」

「どこでお拾いなさいました。」

「根岸の路ばたに落ちていたのだ。どういう料簡りょうけんで拾って来たのか、自分にもわからない。」

かれは正直にこう言ったが、落武者の身で拾い物をして来たなどどあつては、いかにも卑しい浅ましい料簡のように思われて、この親子にさげすまれるのも残念であると、彼はまた正直にその理由を説明した。

「その兜は一度わたしの家にあつた物だ。それがどうしてか往来に落ちていたので、つい拾って来たのだが、あんなものを持ち歩

いていられるものではない。欲しければ置いて行くぞ。」

「ありがとうございます。」

兜は兜、金は金であるから、ぜひ受取つてくれと、勘次郎はかの小判を押付けたが、親子はどうしても受取らないので、彼はとうとうその金を自分のふところに納めて出た。出るときにも親子はいろいろの世話をしてくれて、暗い表まで送つて来て別れた。

上野の四方を取りまいた官軍は、三河島の口だけをあけて置いたので、彰義隊の大部分はその方面から落ちのびたが、三河島へゆくことを知らなかった者は、出口出口をふさがれて再び江戸へ引つ返すのほかはなかった。勘次郎も逃げ路をうしなつて、さらに小塚原から浅草の方へ引つ返した。それからさらに本所へまわ

つて、自分の菩提寺ぼだいじにかくれた。その以後のことはこの物語に必要はない。かれは無事に明治時代の人となつて、最初は小学校の教師を勤め、さらに或る会社に転じて晩年は相当の地位に昇つた。

彼がまだ小学校に勤めている当時、箕輪の円通寺に参詣した。その寺に彰義隊の戦死者を葬つてあるのは、誰も知ることである。そのついでにかの親子をたずねて、先年の礼を述べようと思つて、いささかの手土産をたずさえてゆくと、その家はもう空家になっているので、近所について聞合せると、その家にはお道おかねという親子が久しく住んでいたが、上野の戦いの翌年の夏、ふたりは奥の六畳の間で咽喉のどを突いて自殺した。勿論その子細はわからない。古びた机の上に兜をかざつて線香をそなえ、ふたりはその

前に死んでいたのである。

その話を聞かされて、勘次郎はぎよつとした。そうして、その兜はどうしたかと訊くと、かれらの家には別にこれぞという親類もないので、近所の者がその家財を売って葬式をすませた。兜もそのときに古道具屋に売り払われてしまったとの事であった。かれらの墓もやはり円通寺にあるので、勘次郎は彰義隊の墓と共に拝んで帰った。その以来、彼は彰義隊の墓へまいるときには、かならずかの親子の小さい墓へも香花こうげをそなえるのを例としていた。憲法発布の明治二十二年には、勘次郎ももう四十四歳になっていた。その当時かれは築地に住んでいたので、夏の宵に銀座通りを散歩すると、夜みせの古道具屋で一つの古い兜を発見した。彼

は言い値でその兜を買って帰った。あまりにいろいろの因縁がからんでいたので、彼はそれを見すぐすに忍びないような気がしたからであつた。

かれはその兜を形見として明治の末年に世を去つた。相続者たる邦原君もその来歴を知つていたので、そのままに保存して置いたのである。勿論、その兜が邦原家に復歸して以来、別に変つたこともなかつた。道具屋の金兵衛は明治以後どうしているか判らなかつた。

ところが、先年の震災にあたつて、前にいったような、やや不思議な事件がしゅったい出しゅったい来しゅったいしたのである。何者がその兜を邦原家の門前まで持出したか、また何者がそれを邦原君の避難先まで届けた

か、それらの事情が判明すれば、別に不思議でもなんでもないことかも知れない。ああそうかと笑って済むことかも知れない。しかもその兜の歴史にはいろいろの因縁話が伴っているので、邦原君もなんだか気がかりのようでもあると言っている。したがってそれを届けてくれた女に逢わなかったのを甚だ残念がっているが、それを受取ったのは避難先の若い女中で、その話によると、かの女は三十四、五の上品な人柄で、あの際のことであるから余り綺麗でもない白地の浴衣を着て、破れかかった番傘をさしていたというのであった。

もう一つ、かの女の特徴ともいべきは、左の眼の下に小さい痣のあることで、女中は確かにそれを認めたというのである。邦

原君の父が箕輪で宿をかりた家の母らしい女も、左の眼の下に小さい痣があつた。しかしその女はもう五十年前に自殺してしまつた筈で、たとい生きていたとしても非常の老人になつていなければならぬ。それとも一種の遺伝で、この兜に因縁のあるものは皆その眼の下に痣を持つてゐるのかも知れない。

その以来、邦原君の細君さいくんはなんだか気味が悪いといふので、その兜を自宅に置くことを嫌つてゐるが、さりとしてむざむざ手放すにも忍びないので、邦原君は今もそのままに保存してゐる。そうして、往來をあるく時にも、電車に乗つてゐる時にも、左の眼の下に小さい痣を持つ女に注意してゐるが、その後まだ一度もそれらしい女にめぐり逢わないさうである。

「万一かれが五十年前の人であるならば、僕は一生たずねても再び逢えないかも知れない。」

邦原君もこの頃はこんな怪談じみた事を言い出すようになった。どうかその届け主を早く見付け出して、彼の迷いをさましてやりたいものである。

青空文庫情報

底本：「鷺」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年8月20日初版1刷発行

初出：「週刊朝日」

1928（昭和3）年7月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年10月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

兜

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>